

消化管下部放出性システム

技術分野

- 本発明は、消化管下部に送達させたい物を経口的に摂取し消化管下部に選択的に送達するシステムに関する。更に詳しくは、細菌叢の変動による消化管内pH
- 5 変化の影響を受けず、确实かつ速やかに消化管下部選択的に目的物を送達させるシステムに関する。また本発明は、分子量が1000以下で、ジスルフィド結合を有する化合物<A>と、分子量が1000超で、腸内細菌により分解される性質及び／またはpH低下により、軟化・膨潤ないしは溶解する性質を有する高分子を含有することを特徴とする消化管下部崩壊性組成物、該組成物を用い
- 10 た成形体、及び該成形体を用いた製剤に関する。

背景技術

- 消化管中の結腸に特異的に薬物を送達させることは、潰瘍性大腸炎やクローン病等の局所性消化管疾患の治療に際して、局所に薬物を集積させることにより、治療効果の向上につながる。また、このような送達をさせることは結腸到達前に
- 15 薬物吸収が起こらないことから、全身に薬物が循環することに起因する副作用が低減され、有効部位到達前の薬物損失が防止される。

これらの期待から、これまでに結腸を標的として薬物を送達するシステムは数多く報告されており、大きく3つに分類される。

- 第1はpH変化に対応して薬物を放出するシステムであるが、数多く報告され
- 20 ている一般的な腸溶性製剤の場合、生体側の消化管のpHの日内変動や食事の影響

響が大きいため、製剤が小腸上部で崩壊したり、反対に崩壊せずにそのまま排泄されたりする場合があります、結腸特異的薬物送達が確実に実現するとはいえない。

また、結腸において産生される有機酸による pH 低下を利用して酸可溶性コーティングの外側に腸溶コーティングを施したシステムが開示されている

- 5 が（特開平 10-152431 号公報）、微妙な pH 変化で崩壊することが求められるため、結腸における細菌叢の変化等の影響を受けやすく、確実に結腸特異的に薬物を送達することは困難である。

- 第 2 は時間依存的に薬物を放出するシステムであるが（特公平 7-72130 号公報、特開平 7-196477 号公報、欧州特許 0384646、特開平 7-10
10 2650 号公報、特開平 7-10745 号公報）、これらは消化管内の製剤の移動時間に放出部位が規定されることになり、生体側の消化管運動や食事の影響あるいは病態時の影響を大きく受ける。小腸での滞留時間が長い場合は小腸で崩壊したり、小腸及び大腸での滞留時間が短い場合は崩壊しないまま体外に排泄されるなどの問題もあり、確実に消化管下部の特定の領域に薬物を送達することは困
15 難である。

- 第 3 の腸内細菌を利用したシステムは、近年研究例が増加している。これらはアゾポリマーあるいはジスルフィドポリマーを製剤中に用い、これを腸内細菌の還元活性により分解させ崩壊させるシステム（コペセクラ（J. Kopecek
et. al.）、ファーマシューティカルリサーチ（Pharmaceutical
20 al Research）9 巻、12 号、1540-1545 頁、1992 年；木村ら（Y. Kimura et. al.）、ポリマー（POLYMER）33 巻、24 号、5294-5299 頁、1992 年；国際公開 91/11175 号

公報) と、ポリサッカライドを製剤中に用い、腸内の主に嫌気性細菌の多糖分解活性により分解させ崩壊させるシステム(特表平5-508631号公報; クックら(W. G. Cook et. al)、ファーマシューティカル リサーチ(Pharmaceutical Research) 10巻、10号、S223、1993年) に大別される。

腸内細菌の還元活性は高く、また、菌種による活性の差も小さく、病態などで細菌叢が変化しても影響を受けにくいと言われている(光岡知足: 腸内フローラの代謝、1-17頁、学会出版センター(1988年))。しかしながら、現在開示されているアゾポリマーあるいはジスルフィドポリマーを用いたシステムでは、ポリマーの分解速度が遅く(コペセクら(J. Kopecek et. al.)、ファーマシューティカルリサーチ(Pharmaceutical Research) 9巻、12号、1540-1545頁、1992年)、また特にアゾポリマーではアゾ結合由来の有害物質産生が懸念され、安全性の面でも長期の利用には耐えないという問題点を有する。

また、ポリサッカライドを用いたシステムは元来食物繊維として用いられている物質を用いているため、安全性に関しては問題が小さいと考えられるが、一般的にこれらの物質は結腸での分解速度が遅く(クックら(W. G. Cook et. al)、ファーマシューティカル リサーチ(Pharmaceutical Research) 10巻、10号、S223、1993年)、病態時においては腸内細菌叢の変化、特にポリサッカライドの主な分解菌である嫌気性細菌の減少により(光岡知足: 腸内フローラの代謝、1-17頁、学会出版センター(1988年))、崩壊が進まないという問題点がある。

- ポリサッカライドを用いたシステムの一例として、キトサンを利用したものがある。ポリサッカライドの一種であるキトサンは、腸内細菌による分解を受け、また結腸におけるpH低下により軟化または溶解するため、結腸を標的とした薬物送達システムによく用いられている（特開平4-41422号公報，特開平4-247026号公報）。しかし、キトサンを分解するキトサナーゼやリゾチームといった酵素の結腸内での活性は十分とは言えず、むしろ、キトサンシステムの崩壊機序としては結腸でのpH低下に依存すると考えられている。このため、このシステムの機能は、生体側の結腸内pH変動の影響や、病態時の腸内細菌叢の変化の影響を強く受けるという問題点がある。
- 10 更に、結腸内のpH変動の影響を避け、且つ、結腸における薬物の放出が時間制御によらず、結腸特異的な薬物送達を目的としたCODESというシステムが提案されている（国際公開95/28963号公報）。これはシステム内に、結腸で腸内細菌を利用して有機酸に代謝される糖類を配置し、更に有機酸により溶解される酸可溶性皮膜で被覆したシステムである。しかし、このシステムでも、
- 15 確実な結腸特異的な薬物送達を可能とするかどうかについては、疑問である。
- 従って、個体間あるいは食事の摂取等による、結腸内pHの変動や腸内細菌叢の変化による影響を受けず、結腸特異的で、確実かつ速やかな薬物送達システムが望まれていた。

発明の開示

- 20 本発明の目的は、pHの変動や腸内細菌叢の変化による影響を受けず、消化管下部で選択的に、確実かつ速やかに目的物を送達させるシステムを提供すること

である。また、消化管下部崩壊性組成物、該組成物を用いた成形体及び該成形体を用いた製剤を提供することである。特に前述のような従来技術における問題点、具体的には、腸内の pH 変動や病態時等の腸内細菌叢の変化、あるいは消化管運動や食事の影響など、生体側に起因するさまざまな要因の影響を受けやす

- 5 いという問題点を解決した消化管下部に送達させたい物を経口的に摂取し、消化管下部に選択的に送達するシステムを提供することである。また、消化管下部崩壊性組成物、該組成物を用いた成形体及び該成形体を用いた製剤を提供することである。該成形体として、カプセル、フィルム、シートまたは被覆膜等を提供することである。
- 10 本発明者らは、上記目的を達成すべく、鋭意研究を重ねた結果、分子量が 1000 以下で、ジスルフィド結合を有する化合物< A >（以下、化合物< A >と略記する）と分子量が 1000 超で腸内細菌により分解される性質及び／または pH 低下により軟化・膨潤ないしは溶解する性質を有する高分子< B >（以下、高分子< B >と略記する）を含有する消化管下部崩壊性組成物が腸内疑似環境の皮膜崩壊試験で速やかに崩壊すること、該組成物が動物実験において、消化管下部で選択的に崩壊することを見出し、本発明を完成した。

以下、本発明を説明する。

本発明の第 1 の態様は、化合物< A >と高分子< B >を含有することを特徴とする、消化管下部崩壊性組成物である。

- 20 本発明の第 2 の態様は、化合物< A >を含むドメインを、高分子< B >を含有するマトリックス中に分散することを特徴とする、消化管下部崩壊性組成物である。

本発明の第 3 の態様は、化合物< A >、高分子< B >、及び消化管下部での崩壊速度を制御する物質を含有することを特徴とする、消化管下部崩壊性組成物である。

本発明の第 4 の態様は、化合物< A >と高分子< B >を含有することを特徴とする消化管下部崩壊性組成物を、形付けした、有効成分< C >を消化管下部で放出するための成形体である。

本発明の第 5 の態様は、少なくとも、有効成分< C >および化合物< A >と高分子< B >を含有することを特徴とする消化管下部放出性組成物が、腸溶性高分子膜で被覆されたことを特徴とする、消化管下部放出性製剤である。

10 本発明の第 6 の態様は、有効成分< C >及び薬学的に許容される担体を含む組成物が、化合物< A >及び高分子< B >を含有することを特徴とする消化管下部崩壊性組成物で被覆され、さらに腸溶性高分子膜で被覆されたことを特徴とする、消化管下部放出性製剤である。

本発明の第 7 の態様は、化合物< A >と高分子< B >を含有することを特徴とする消化管下部崩壊性組成物及び腸溶性高分子膜を用いることを特徴とする、消化管下部に送達させたい物を経口的に摂取し、選択的に消化管下部で放出するためのシステムである。

本発明の第 8 の態様は、消化管下部に送達させたい物を、化合物< A >及び高分子< B >を含有することを特徴とする消化管下部崩壊性組成物で被覆し、または組成物中に含有させ、さらに腸溶性高分子膜で被覆されたことを特徴とする、消化管下部に送達させたい物を経口的に摂取し、選択的に消化管下部で放出するためのシステムである。

図面の簡単な説明

図1は、実施例1の結果から得られる、フィルム表面を示す図面代用写真である。(a)は試験前の状態を示し、(b)は炭酸緩衝液による結果を示す。

図2は、実施例1の結果から得られる、フィルム表面を示す図面代用写真である。
5 図3は、比較例1の結果から得られる、フィルム表面を示す図面代用写真である。

(a)は試験前の状態を示し、(b)は炭酸緩衝液による結果を示す。

図4は、比較例1の結果から得られる、フィルム表面を示す図面代用写真である。盲腸内容物懸濁液による結果を示す。

10 図5は、シームレスカプセルを飽食状態のラット ($n = 3$) に投与した後の経時的な消化管内状態を表形式で示す図である。

図6は、実施例5で作製したキャストフィルムおよび比較組成物のキャストフィルムの崩壊試験の結果を示すデジタルマイクロスコープで撮影した画像を示す図である。(a)は実施例5で作製したキャストフィルムであり、(b)は
15 比較例2で作製したキャストフィルムであり、各画像中、左側(白く見えるフィルム)が炭酸緩衝液中で、右側が盲腸内容物懸濁液中で振とうした結果である。

図7は、実施例6のコーティングカプセルのイヌに投与した後の経時的なモデル薬物およびマーカー薬物の血中濃度を示す図である。

発明を実施するための最良の形態

以下、さらに詳細に本発明を説明する。

最初に、本発明の明細書中の各構成要素並びに用語について説明する。

本発明において、「消化管下部」とは、回腸及び大腸の部分の意味する。また、

- 5 「回腸」とは、小腸の第3部位で、十二指腸、空腸に続く部分である。「大腸」とは、盲腸、結腸、直腸からなる部位までの部位を意味する。「盲腸」とは、大腸が始まり、回腸が片側から開く盲嚢である。消化管下部では、腸内細菌が回腸から増え始め、大腸内では多種、多量に棲息している。

- 本発明の「消化管下部崩壊性組成物」とは、消化管下部で選択的に崩壊する機能性材料である。本発明の「消化管下部崩壊性組成物」は、化合物<A>と高分子を含有することを特徴とする。さらに、消化管下部での崩壊性を制御する物質を含んでいても良い。この崩壊速度を制御する物質は、小腸内での崩壊耐性を付与するための物質、消化管下部での崩壊を促進する物質とにわけて考えることも可能である。
- 10

- 15 また本発明の「消化管下部崩壊性組成物」は、化合物<A>と高分子とが均質に混じった組成物でも、また特定の秩序を保った組成物でも良く、まったく無秩序な不均一な組成物であっても良いが、化合物<A>を含むドメインが高分子を含有するマトリックス中に分散しているものが好ましい。より具体的には、化合物<A>を含む粒子が、高分子を含有し高分子を主要
- 20 構成成分とするマトリックス中に均一に分散したものが望ましい。化合物<A>を含む粒子は、「消化管下部崩壊性組成物」にした時に、膜厚に比し、十分に小さいもので粒子のそろったものが望まれる。

「マトリックス」とは、本発明では、高分子が単独または混合物で、一体化されて均質混合物または組成物として存在する状態を指し、「ドメイン」とは、マトリックス内に、マトリックスとは非相溶な成分が、分散してほぼ均質に位置している状態を言い、ドメインを有するマトリックスは、これらの成分からなる単

5 純混合物や単純組成物とは異なる特性を有する。

マトリックスは、消化管下部での崩壊性を制御する物質を含んでいてもよい。

本発明で用いられる「分子量が1000以下で、ジスルフィド結合を有する化合物<A>」は、腸内細菌の還元によりジスルフィド結合が解裂してより低分子の化合物に分解し、当該分解物の水溶性の向上及び／または酸性が化合物<A>

10 よりも強くなるという性質を有する。かかる水溶性の向上は、該組成物が水を含んだとき、又は水と接したとき、化合物<A>を含有する粒子が腸内細菌による還元反応の結果、溶解することを意味し、ひいては、皮膜に微細な穴をあけるのに寄与する。このことにより、更に本発明の組成物への腸内の水の浸透が促進され、あるいは腸内細菌が十分浸透し、組成物の崩壊性を高めることができる。一

15 方、酸性の増加は、本発明に供される特定の高分子を軟化・膨潤或いは溶解させるのに寄与する。酸性の増加と水溶性の増加を合わせ持つと、消化管下部で膜崩壊に相乗的に寄与する。

化合物<A>には、ジスルフィド結合を有するアミノ酸誘導体で、システインもしくはシステインを含むペプチドがジスルフィド結合したオリゴペプチドが含まれる。化合物<A>は、天然に存在するものだけでなく、D体もしくはL体ア

20 ミノ酸から合成することが可能なペプチドも包含される。化合物<A>の具体例としては、ジスルフィド結合を有するアミノ酸誘導体として、L-シスチン、D

- ーシスチン、DLーシスチン、ジグリシルシスチン、シスタミン、Lーシスチニ
ルジグリシン、グルタチオンジスルフィドが挙げられ、合成有機低分子として、
チオグリコール酸ジスルフィド ($\text{HOOC}-\text{R}-\text{S}-\text{S}-\text{COOH}$ / Rは低級アル
キレン基を表す) が挙げられる。シスチン (Lーシスチン、Dーシスチン、D
5 Lーシスチン、またはそれらの任意の混合物を含む) がより好ましい。

この化合物<A>の添加量としては、製剤化において問題がなければ特に制限
はない。具体的には、本発明の組成物中に1～90%の割合で含有させることが
でき、本システム中に、1～90%の割合で含有させることができ、成形体中に
は、1～90%の割合で使用する可以使用。被覆膜に使用する場合には、被
10 覆膜中に10～80%で使用する可以使用。ここでこの%は、重量%であ
り、それぞれ乾燥重量に対する値である。

本発明の組成物、より詳細には成形体あるいは被覆膜中に使用する場合には、
化合物<A>が、粒子状態のままで基剤中に分散していることが好ましい。腸内
細菌の還元によりジスルフィド結合が解裂してより低分子の化合物に分解し、当
15 該分解物の水溶性が向上し、水分と接することで、化合物<A>が粒子状で存在
していた部分に多数の微細な穴があき、本発明の組成物への腸内の水の浸透を促
進する、あるいは腸内細菌が十分浸透し、組成物の崩壊性を、より高めることが
できる。

「分子量が1000超で、腸内細菌により分解される性質及び／または、pH
20 低下により、軟化・膨潤ないしは溶解する性質を有する高分子」とは、腸
内細菌のプロテアーゼ、リゾチーム及び多糖分解酵素等により分解される性質を
有するか、pHの低下、即ち、中性付近よりpHが低くなり酸性が増すことで軟

化・膨潤ないしは溶解する性質を有するか、その両方の性質を有する分子量が1000超の高分子を意味する。腸内細菌による分解とpH低下による軟化、膨潤ないし溶解とが同時に起こると、高分子を含有する組成物、より詳細には被覆膜の消化管下部での崩壊が、よりすすみ、消化管下部に送達させたい物をより迅速かつ部位選択的に放出することが可能になる。従って、高分子としては、腸内細菌により分解され且つpH低下で軟化・膨潤ないしは溶解する性質を有する高分子であることが好ましい。ここでいう分子量は平均であり、数平均でも重量平均でもよい。

かかる高分子としては、キトサンのような天然陽イオン高分子と、アクリル酸系陽イオン高分子のような合成陽イオン高分子の二つに大別できる。高分子として具体的には、天然陽イオン高分子としてキトサン、合成陽イオン高分子としてメタアクリル酸ジメチルアミノエチル・メタアクリル酸メチル・メタアクリル酸ブチルコポリマー（たとえば商品名；オイドラギットE（独・レーム社））、ポリビニルアセタールジエチルアミノアセテート（たとえば商品名；AEA（三共））などが挙げられる。好ましくは、天然陽イオン高分子、より好ましくはキトサンが挙げられる。

高分子は、前述した2種以上を混合して使用することも可能である。この場合、好ましくは天然陽イオン高分子と合成陽イオン高分子との組合わせが挙げられる。種類の異なるものを組み合わせることで、耐水性を付与したり、崩壊速度の調節を行う等の機能を向上させることも可能である。例えば、合成陽イオン高分子として、酸可溶性のある水で膨潤しにくい疎水性の高分子を組み合わせることで、耐水性の向上が可能である。

キトサンとは、かに、えび等の甲殻類に多量に含有されているキチンを、通常濃アルカリで処理して得られる、アセチル基を完全にあるいは部分的に脱アセチル化して得られる脱アセチル化合物であり、2-アミノ-2-デオキシ-D-グルコースが β -1, 4結合した直鎖状の多糖構造を有している。本発明に用いる

5 キトサンは、脱アセチル化度が、40～60モル%のもの、60%以上のもの等いずれを用いてもよく、由来生物、精製法、及び脱アセチル化法等に何ら限定されない。消化管下部での崩壊性を上げるためには、脱アセチル化度が60～98モル%である場合が、好ましい。

この高分子は、本発明の組成物中に10～99%の割合で含有させることができ、本システム中に、10～99%の割合で含有させることができ、成形

10 体中には、10～99%の割合で使用する事ができる。被覆膜に使用する場合には、被覆膜中に10～80%で使用する事が好ましい。ここでこの%は、重量%であり、それぞれ乾燥重量に対する値である。

この高分子を組合わせて使用する際には、例えば、天然陽イオン高分子

15 と合成陽イオン高分子の配合量比は、99/1～1/99とすることができる。この配合比は、99/1～30/70であることが好ましく、99/1～50/50であることがより好ましい。

本発明の消化管下部崩壊性組成物においては、上記構成成分の他に、消化管下部で崩壊速度を制御する物質を添加することができる。この崩壊速度を制御する

20 物質には、小腸内で崩壊しないような耐性を付与するための物質及び消化管下部での崩壊を促進する物質が挙げられる。小腸内での崩壊耐性を付与するための物質としては、エチルセルロース、寒天、ペクチン金属塩、カラギーナン、架橋さ

れた多糖あるいはタンパク質等の水不溶性高分子、あるいはメタアクリル酸ジメチルアミノエチル・メタアクリル酸メチル・メタアクリル酸ブチルコポリマー、ポリビニルアセタールジエチルアミノアセテート等の酸可溶性で水に膨潤しにくい疎水性の高分子が挙げられる。また、消化管下部での崩壊を促進する物質として、ゼラチン、ペクチン、でんぷん、セルロース等の高分子が挙げられる。これらの崩壊速度を制御する物質は、本発明の消化管下部崩壊性組成物中に、単独で用いても良いが2種以上混合して用いることも可能である。

一方、水溶性の高い薬物の場合、崩壊耐性を付与しても水が徐々に浸透することで薬物が漏れ出すことがある。この場合には、水の浸透を抑えるために薬物相にステアリン酸マグネシウムのような撥水性物質を添加したり、薬物相の周りを硬化油のような物質で被覆することで薬物漏出を抑えることができる。

小腸内での崩壊耐性を付与するための物質は、小腸内において、該組成物中の高分子、例えば高分子< B >の膨潤・溶解を抑制することが可能である。また、該組成物中に消化管下部での崩壊を促進する物質が同時に添加された場合には、その消化酵素による分解（例えば、ゼラチンのプロテアーゼによる消化）などを抑制することが可能である。

消化管下部での崩壊を促進する物質は、腸内細菌のプロテアーゼ、リゾチームあるいは多糖分解酵素などで分解される高分子であり、該組成物の崩壊を促進することが可能である。

これら消化管下部で崩壊速度を制御する物質は、本発明の消化管下部崩壊性組成物、その形態によって添加量及び配合比率は大きく異なる。

小腸内での崩壊耐性を付与するための物質は、本発明の組成物中に、0.1～

80%の割合で含有させることができ、成形体中には、0.1～80%の割合で使用することが好ましく、被覆膜中には、0.1～70%の割合で使用することが好ましい。消化管下部での崩壊を促進する物質は、本組成物中に、0.1～80%の割合で含有させることができ、成形体中には、0.1～80%の割合で使用することが好ましく、被覆膜中には、0.1～70%の割合で使用することが好ましい。ここでこの%は、重量%であり、それぞれ乾燥重量に対する値である。

本発明の消化管下部崩壊性組成物の製造方法は、例えば化合物<A>を含む懸濁液と高分子を含む溶液を混合し乾燥する方法、化合物<A>を高分子を含む溶液に分散させた後乾燥する方法、化合物<A>と高分子を混合後、適当な溶媒を添加し高分子を溶解させ、均一化させた後乾燥する方法が挙げられる。

更に消化管下部崩壊性組成物には、崩壊速度制御のための物質を添加することができ、その場合には、崩壊速度制御物質を適当な溶媒に必要な応じて加熱等を実施して溶解した溶液あるいは懸濁した液と化合物<A>を含む懸濁液と高分子を含む溶液を必要な応じて加熱条件下で混合した後乾燥する方法、崩壊速度制御物質を加熱溶解した溶液あるいは懸濁した液に化合物<A>を分散させた懸濁液と高分子を含む溶液を必要な応じて加熱条件下で混合した後乾燥する方法、化合物<A>、高分子、崩壊速度制御物質を混合後、適当な溶媒を添加し高分子、崩壊速度制御物質を必要な応じて加熱して溶解もしくは懸濁させ、均一化させた後乾燥する方法等が挙げられる。この際の製造に用いられる溶媒は、薬学的に使用可能な水もしくは酸溶液である。

本発明の組成物の乾燥にあつては、自然乾燥もしくは加温下で送風して乾燥させる。例えば、組成物を噴霧しながら乾燥する、あるいは対象物に塗布後乾燥させる。また例えば、組成物中に熱可塑性の物質があれば、組成物を冷却し固化させた後、乾燥する。これらの乾燥時もしくは乾燥後、①製造工程中で揮発性の酸
5 を使用する場合には加湿処理を施すことで酸を除去する効率が良くなる、②有機溶媒を適当に用いることでも乾燥効率を上げることができる、などの点を考慮することも製造時においては重要である。

これら製造方法において、乾燥前に、消化管下部に送達させたい物を添加することができる。

10 消化管下部崩壊性組成物を、上記の方法による乾燥時に、適当な形態に成形することで、成形体を得られる。成形体の乾燥時に適当な鑄型を使用することにより、針状、棒状、微粒子状、スポンジ状リング状等の各種形状に成形することも可能である。この本発明の成形体とは、例えば、有効成分を含むためのカプセル、フィルム、シート、製剤に使用される被覆膜、繊維、棒状物、粒状物、粉
15 末等湿式成形によって成形可能なものである。また、これらの加工品である不織布シート、織編物、綿状物、他材へコーティングされたものも包含される。

本発明において化合物< A >は、粉体、懸濁液（微粒子懸濁液を含む）、あるいは溶液状態でも使用可能である。化合物< A >を含む粉体は、例えば、ボールミルにより、適当な粒度に揃えて使用するほうが好ましい。化合物< A >を含む
20 粒子は、100 μ m以下の粒度で使用するが、50 μ m以下であることが好ましい。本発明の消化管下部崩壊性組成物に用いるに当たり、化合物< B >として、キトサンは、希酸溶液に溶解して使用することができる。キトサンを溶解して用

いる場合、キトサンの溶媒としては、塩酸、酢酸、乳酸、クエン酸、リンゴ酸、酒石酸、グルタミン酸、アスパラギン酸等の溶液が挙げられるが、前述した加湿処理により酸を除去する場合には揮発性酸である酢酸を用いることが好ましい。

酸とキトサン配合重量比は30／70～99／1であることが好ましい。キ

- 5 トサン溶液濃度は、製造可能な粘度であれば特に制限されないが、キトサン溶液粘度が、1重量％溶液（1％酢酸）として1～1000cpsであることが好ましい。キトサン溶液の粘度を調整するために、異なる粘度のキトサン溶液を混合して用いてもよく、その混合比も任意に設定できる。脱アセチル化度と粘度の組み合わせも、任意に設定することができる。

- 10 化合物＜B＞として合成陽イオン高分子を用いる場合は、酸の他にアルコール、アセトン等の水溶性有機溶媒あるいはクロロホルム、塩化メチレン、酢酸エチル等の水不溶性有機溶媒に溶解しても用いることができる。

また、キトサンと合成陽イオン高分子を組合わせて用いる場合は、酸溶液に両者を溶解してもよいし、キトサンを酸溶液に溶解後、合成陽イオン高分子を水溶

- 15 性有機溶媒に溶解したものを加えてもよい。水溶性有機溶媒としては、エタノール、エタノール、イソプロパノール等の低級アルコール類やアセトンが好ましい。水溶性有機溶媒の添加量が高すぎるとキトサンが析出するために、水溶性有機溶媒と酸溶液の比率は1／99～50／50であることが好ましい。

本明細書における化合物＜A＞と高分子＜B＞を含有することを特徴とする消

- 20 化管下部崩壊性組成物を、形付けした消化管下部で選択的に内容物を放出するための成形体について説明する。

この成形体には、主に以下の①～③形態がある。①として、内容物と外部環境

を隔絶するための密封容器状の形態があり、例えば、粉末状、顆粒状の内容物を封入する場合である。代表的な例としてカプセルがある。②として、内容物を包み込む形態があり、例えば、錠剤や顆粒をコートした皮膜や液状の内容物を含んだソフトカプセルが挙げられる。代表的な例は、フィルム、シートあるいは製剤
5 に使用される被覆膜などがある。③として、内容物も同時に含む形態、例えば、成形体に内容物が取り込まれている場合である。

この成形体の機能は、消化管下部へ移動した後、消化管下部で増加する細菌叢の還元反応が引き金となり、この成形体に穴があき内容物が透過することにより、あるいはこの成形体が崩壊することにより、消化管の部位選択的に内容物
10 が外部へ放出されることである。

より詳細には、成形体表面にある化合物＜A＞が比較的速やかに分解し、当該分解物の水溶性の向上及び／または酸性が化合物＜A＞よりも強くなることにより、その化合物＜A＞と高分子＜B＞を含有する成形体に微細な穴があき、腸内の水の浸透が促進され、あるいは腸内細菌を十分浸透させるのに機能し、高分子
15 ＜B＞の崩壊性を高める。すなわち、化合物＜A＞が存在していた部分に多数の微細な穴があくことで、高分子＜B＞が腸内細菌により分解される及び／または、pH低下により、軟化・膨潤ないしは溶解される。この時、好ましくは腸内細菌による分解とpH低下による軟化・膨潤・ないし溶解する効果が同時に起こると、より速やかにかつ迅速に、この成形体が崩壊し、外部へ内容物が放出さ
20 れることになる。

成形体としては、a) 化合物＜A＞と高分子＜B＞を含有することを特徴とする消化管下部崩壊性組成物を、形付けした内容物を消化管下部で放出するための

- 成形体、b) 化合物< A > と高分子< B > 及び消化管下部の崩壊速度を制御する物質を含有することを特徴とする消化管下部崩壊性組成物を、形付けした内容物を消化管下部で放出するための成形体、c) 成形体中に化合物< A > を含むドメインを、高分子< B > を含有するマトリックス中に分散することを特徴とする消化管下部崩壊性組成物を、形付けした内容物を消化管下部で放出するための成形体、d) 成形体中に化合物< A > を含むドメイン、少なくとも高分子< B >、及び消化管下部の崩壊速度を制御する物質を含有することを特徴とする消化管下部崩壊性組成物を、形付けした内容物を消化管下部で放出するための成形体であることが好ましい。
- 5 10 これら成形体を使用される高分子< B > は、前述のとおり単独で使用しても、組合わせて使用してもよい。

- 「成形体」とは、消化管下部崩壊性組成物を適当な形態に成形した物を意味する。成形体には、有効成分を含む為のカプセル、フィルム、シート、製剤に使用される被覆膜、繊維あるいは棒状物、粒状物、粉末等の成形された物が含まれる。また、消化管下部に送達させたい物を含む組成物を消化管下部崩壊性組成物でコーティングしてできた物も包含される。
- 15

- 本発明の成形体の乾燥にあつては、自然乾燥もしくは加温下で送風して乾燥させる。例えば、組成物を噴霧しながら乾燥する、あるいは対象物に塗布後乾燥させる。また例えば、組成物中に熱可塑性の物質があれば、組成物を冷却し固化させた後、乾燥する。これらの乾燥時もしくは乾燥後、①製造工程中で揮発性の酸を使用する場合には加湿処理を施すことで酸を除去する効率が良くなる、②有機溶媒を適当に用いることでも乾燥効率を上げることができる、などの点を考慮す
- 20

ることも製造時においては重要である。

また、消化管下部崩壊性組成物、特に成形体とする場合で、被覆を行う場合の方法としては、上記方法で調製した高分子< B >を含む溶液に化合物< A >が均一に分散した溶液を噴霧乾燥する方法、上記方法で調製した高分子< B >を含む

- 5 溶液に化合物< A >が均一に分散した溶液に被覆物質を浸漬後引き上げて乾燥する方法、及びソフトカプセルの製法で被覆する方法が挙げられる。

- 噴霧乾燥により錠剤、カプセル及び顆粒剤表面に成形体の被覆を行う場合は、錠剤及びカプセルではコーティングパン等、顆粒剤では流動層造粒装置や転動層造粒装置等の装置中で製剤を攪拌しておき、そこにスプレーノズルで、< B >を含む溶液に化合物< A >が均一に分散した溶液を噴霧しながら乾燥する方法を用いることにより被覆できる。
- 10

- 被覆する物質を浸漬して成形体の被覆を行う場合は、主にハードカプセルの表面を被覆する場合に用いられるが、成形ピンでハードカプセルを成形・乾燥後更に高分子< B >を含む溶液に化合物< A >が均一に分散した溶液に浸漬後引き上げて乾燥する方法により被覆が可能である。また、成形ピンを直接高分子< B >を含む溶液に化合物< A >が均一に分散した溶液に浸漬後引き上げて乾燥することでハードカプセルの製造も可能である。
- 15

- なおハードカプセルへの被覆の際には、接合部の被覆を完全に行うために予めシール処理を施すことが好ましい。
- 20 これらの被覆及び乾燥を行った後、必要に応じて加湿処理を行い、被覆中の酸を除去することで小腸での耐性を向上させることが可能となる。

例えば、キトサンを構成成分とする場合、揮発性の酸除去のための加湿は例え

ば30～40℃、相対湿度60～75%の条件下で、処理時間は24～100時間程度で行うことができる。

ソフトカプセルは、例えば、皮膜成分として化合物<A>としてシスチン、高分子としてキトサンの他に、水不溶性の高分子として寒天や消化管下部の
5 崩壊を促進する高分子としてゼラチン等を加え、ロータリーダイ法または液中滴下法（シームレス法）等の通常の方法を用いることにより、製造することができる。

また、ソフトカプセルを製造する際には、小腸での耐性を付与する為、化合物<A>および高分子に加えて熱可塑性物質として、例えば寒天を含有させ
10 ることが望ましい。更に、消化管下部での崩壊性を制御する為、化合物<A>及び高分子に加えて、熱可塑性物質、例えば、寒天やゼラチンを含有させることが望ましい。

シームレスソフトカプセルの具体的な製造方法を以下に示す。寒天に水を加え加熱溶解した液にシスチンを分散し、更にゼラチンを加えて溶解し、別に酸を加
15 えて溶解したキトサン溶液を加えて均一な懸濁液としたものを皮膜液とする。皮膜液の温度は成分の劣化を抑えるために80℃以下が好ましく70℃以下がより好ましい。皮膜液の粘度は70℃において300cps以下が好ましく、250cps以下がより好ましい。内容液は油脂に薬物を溶解、懸濁、あるいは薬物水溶液と乳化して製する。また、前述したように三重ノズルを用いる場合は水溶液
20 のまま内容液とすることができる。二重又は三重ノズルの内側から内容液を、外側から皮膜液を定量ポンプにより一定速度で油液中に吐出し、振動、衝撃、カプセル液と油液との速度差等何らかの物理的な力により、この吐出液を一定間隔で

切断し、油液と皮膜液との界面張力で直径0.1～20mmの球形シームレスソフトカプセルを製する。

尚、上記は主として本発明のシームレスソフトカプセルに応用した一例について説明したが、本発明はハードカプセル、ロータリーダイカプセル、その他のソ

5 フトカプセルについても同様に応用可能である。

本発明の成形体が、化合物<A>と高分子からなる成形体である場合には、小腸で崩壊しないような耐性を付与するために、アルカリ処理もしくは水溶性のアルコール系有機溶媒で処理すること、あるいは加湿処理することが望ましい。

10 本発明のシステムは、化合物<A>と高分子を含有することを特徴とする消化管下部崩壊性組成物、及び腸溶性高分子膜を用いて作製され、消化管下部に送達させたい物（例：有効成分<C>或いはビフィズス菌などの菌体など）を、経口的に摂取し選択的に消化管下部で放出するためのシステムである。

15 また、本発明のシステムは、消化管下部で放出させたい物を、化合物<A>と高分子を含有することを特徴とする消化管下部崩壊性組成物で被覆してても、または組成物中に含有させてもいずれの場合でも良いが、これらがさらに腸溶性高分子膜で被覆されていることが好ましい。さらに、本発明のシステムに使用される消化管下部崩壊性組成物は、化合物<A>を含むドメインが高分子

20 を含有するマトリックス中に分散しているものが好ましい。

本発明のシステムに使用される高分子は、前述のとおり単独で使用しても、組合わせて使用しても良い。

本発明のシステムは、消化管下部崩壊性組成物、より詳細には該組成物を用いた成形体、及び腸溶性高分子膜を用い、有効成分< C >を選択的に消化管下部で放出する製剤のみならず、徐放性製剤、診断方法やそれに使用するもの、あるいは機能性食品等をも包含する。例えば、本発明のシステムは、上記特徴の製剤が

5 主な態様であるが、これらの態様のみならず、パルス放出型持続製剤への使用も本発明のシステムの一態様である。即ち、消化管下部放出性製剤を遅放性の1ユニットとして、速放性ユニットと組み合わせることにより、例えば、胃内、小腸で薬物を放出するユニットが順次崩壊し、後に消化管下部で薬物を放出するユニットが崩壊するような持続性製剤を得ることが可能である。持続性が望ましい各種

10 薬物に応用が可能である。

また、本発明のシステムの一態様には、治療の分野だけでなく、診断の分野がある。例えば、造影剤などの薬剤を封入したカプセルを服用後、消化管下部で放出させ、X線及びNMR画像成形術と組合わせて使用することが可能である。

また、他の診断領域は、アレルギーの診断の為に、抗原（アレルゲン）やアレル

15 ギー性食品成分と考えられるものを消化管下部へデリバリーすることも可能である。さらに、本発明のシステムの一態様には、機能性食品がある。例えば、ビフィズス菌あるいはビフィズス菌増殖作用を有する物質（例；オリゴ糖など）などをカプセルとし、消化管下部で選択的に放出させることで、腸内のビフィズス菌を増やし、その整腸作用を利用することが可能である。

20 本発明の「消化管下部放出性製剤」とは、少なくとも、有効成分< C >及び化合物< A >と高分子< B >を含有することを特徴とする消化管下部崩壊性組成物が、腸溶性高分子膜で被覆されてことを特徴とする消化管下部放出性製剤で

ある。消化管下部で選択的に崩壊する機能性材料である本発明の「消化管下部崩壊性組成物」を用い、さらに腸溶性高分子膜を用いることにより、消化管下部で選択的に有効成分< C >を放出する機能を有する製剤である。

また、本発明の製剤は、有効成分< C >及び薬学的に許容される担体を含む組成物が、化合物< A >と高分子< B >を含有することを特徴とする消化管下部崩壊性組成物で被覆され、さらに腸溶性高分子膜で被覆されていることが好ましい。さらに、本発明のシステムに使用される消化管下部崩壊性組成物は、化合物< A >を含むドメインが高分子< B >を含有するマトリックス中に分散しているものが好ましい。

10 本発明の消化管下部放出性製剤において、高分子< B >は前述のとおり単独で使用しても、組合わせて使用しても良い。

本発明の消化管下部放出性製剤における剤形としては、錠剤、顆粒剤、細粒剤、散剤、カプセル剤等が挙げられるが、いずれの形態をとってもよい。例えば錠剤においては、有効成分を含む圧縮成形された素錠を、本発明の組成物の皮膜で被覆することが可能である。特にステロイド等非常に脂溶性の高い薬物を結腸のような水分の少ない環境中に速やかに分散させるためには、溶液状態または懸濁液状態の薬物を充填したカプセルの形態が好ましく、製造コストを考慮した場合ソフトカプセルの形態がより好ましい。ソフトカプセルでカプセル化できる薬物は油脂に溶解しやすい脂溶性の高いものが一般的であるが、水溶性薬物の場合は油脂に薬物を懸濁する方法で実施可能である。また、シームレスカプセルに水溶性薬物を充填する場合、油脂に薬物を懸濁する方法の他に、三重ノズルを用いて薬物水溶液と皮膜の間に油脂層を配する方法も実施可能である（特開平 8 -

15

20

10313)。これら各種製剤は、通常の知識を有する当業者が製造することができる。

本発明で対象とする消化管下部に送達させたい物としては特に制限はない。

本発明のシステムを機能性食品として用いる場合、例えば、ラクトミン製剤、

- 5 ビフィズス菌・ラクトミン配合、酪酸菌、耐性乳酸菌などの乳酸菌製剤、 β -ガラクトシダーゼ、チラクターゼなどの乳糖分解酵素薬、ビタミン類などが挙げられる。

本発明のシステムを診断用に用いる場合、アミドトリゾ酸、硫酸バリウムなどの造影剤の薬剤などが挙げられ、これを封入したカプセルを服用し、X線や

- 10 NMR画像成形術と組合わせて使用する。アレルギー診断の為の、抗原（鶏卵、牛乳、大豆、小麦、ピーナッツ、ソバ、バナナなどのアレルゲン）やアレルギー性食品成分（食品に含まれる薬物、着色料、保存料、イースト、細菌など）等が挙げられ、これを消化管下部へ放出させて使用する。

本発明のシステムを、医薬（動物薬）製剤として用いる場合、「消化管下部に

- 15 送達させたい物」は、「有効成分<C>」の説明となる。以下の（１）～（４）が挙げられる。

（１）治療薬の部位特異的な送達が望ましいものとして、消化管下部の疾患に有効とされる薬物、例えばクローン病、潰瘍性大腸炎、結腸癌等の治療薬などを一例として挙げることができる。この具体例として、

- 20 メサラジン、５-アミノサリチル酸（５-ASA）、サラゾスルファピリジン等の５-ASA誘導体、酢酸コルチゾン、トリアムシノロン、デキサメタゾン、ヒドロコルチゾン及びプレドニゾロン、ベタメタゾン、吉草酸ベタメタゾン、酢

酸パラメタゾン、酢酸フルドロコルチゾン、酢酸ハロプレドン、フルオロシ
ノロンアセトニド、フルオシノニド、酢酸ヒドロコルチゾン等のステロイド、ブ
デソニド、プロピオン酸ベクロメタゾン、プロピオン酸フルチカゾン、ジプロピ
オン酸ベタメタゾン等のアンテドラッグタイプのステロイド、

- 5 シクロスポリン、6-メルカプトプリン、タクロリムス、アザチオプリン、ミ
ゾリビンのような免疫抑制剤、ウリナスタチン、メシル酸カモスタット等のプロ
テアーゼインヒビター、EPA、DHA等の高度不飽和脂肪酸及びそれらのエス
テル、テガフル、フルオロウラシル、ブレオマイシン等の抗癌剤、

- 金チオリンゴ酸ナトリウム、ペニシラミン、オーラノフィン、ロンザリットニ
10 ナトリウム、アクタリオット等の抗リウマチ剤、プロピオン酸ベクロメタゾンな
どの抗喘息剤、カルバゾクロムスルホン酸ナトリウム、メシル酸アドレノクロム
グアニルヒドラゾン、エタンシラート、 ϵ -アミノカプロン酸、トラネキ
サム酸、トロンビン、塩化セルロース、ゼラチン、オレイン酸モノエタノールア
ミン、ポリカゾールなどの止血薬、アムホテリシンB、フルトシン、ミコ
15 ナゾール、フルコナゾール、イトラコナゾール、グリセオフルビンなどの抗真菌
剤、 β -ラクタム系（ペニシリン系、セフェム系）、アミノ配糖体系、マクロラ
イド系、テトラサイクリン系、ニューキノロン系、バンコマイシン、クリンダマ
イシンなどの各抗生物質、サリチル酸系（サリチル酸ナトリウム、アスピリン、
サザピリン等）、アリール酢酸系（ジクロフェナクナトリウム、トルメチンナト
20 リウム、フェンブフェン、インドメタシン、アンフェナクナトリウム、メ
ブメトンなど）、プロピオン酸系（イブプロフェン、ケトプロフェン、ナプロキ
セン、ロキソプロフェンナトリウムなど）、フェナム酸系（フルフェナム酸、メ

フェナム酸、フロクタフェニン、トルフェナム酸など）、ピラゾロン系（ケトフェニルブタゾンなど）、オキシカム系（ピロキシカム、アンピロキシカムなど）等の抗炎症剤、塩酸プロカイン、塩酸オキシプロカイン、アミノ安息香酸エチル、塩酸コカイン、塩酸テトラカイン、塩酸リドカイン、塩酸ジブカイン、塩酸プロトカイン、オキサゼインなどの局所麻酔剤、シサブリドなどの消化管運動促進剤が挙げられる。

（２）また、消化管下部へ直接送達させたいものとして、例えば、緩下薬および下痢止め薬等が挙げられ、結腸において選択的に放出されることが望ましい。下剤の具体的な例としては、大腸刺激性下剤があり、例えば、センナ、大黄、アロエなどの生薬類に含まれるアトラキノン系誘導体、フェノバリンなどのフェノールフタレイン誘導体、ラキソベロンなどのジフェニール誘導体、ビスコジルなどの大腸刺激性下剤、ひまし油、オリーブ油などの小腸刺激性下剤、などが挙げられる。また、下痢止めの具体例としては、タンニン酸アルブミン、ビスマス製剤などの収斂薬、塩化ベルベリン、塩化ベルベリン配合剤などの殺菌剤、アヘンアルカロイド、臭化メペンゾラート（副交感神経遮断薬／抗コリン薬）、塩酸ロペラミド、マレイン酸トリメブチン、オキサセザイン、臭化チキジウム、シサブリドなどの腸管運動抑制薬などが挙げられる。

（３）上部消化管において、薬物の胃壁に対する直接の作用等による胃腸障害を引き起す可能性のある薬物、例えば非ステロイド性抗炎症剤（NSAID）などを、消化管下部で選択的に放出させて吸収させることも可能である。具体例としては、サリチル酸系（サリチル酸ナトリウム、アスピリン、サザピリン等）、アリール酢酸系（ジクロフェナクナトリウム、トリメチンナトリウム、フェン

ブフェン、インドメタシン、アンフェナクナトリウム、メブメトンなど）、プロ
ピオン酸系（イブプロフェン、ケトプロフェン、ナプロキセン、ロキソプロ
フェンナトリウムなど）、フェナム酸系（フルフェナム酸、メフェナム酸、フロ
クタフェニン、トリフェナム酸など）、ピラゾロン系（ケトフェニルブタゾンな
5 ど）、オキシカム系（ピロキシカム、アンピロキシカムなど）等の抗炎症剤が挙
げられる。

（４）上部消化管での分解など（ペプチド）特に消化管上部での分解を抑制する
必要がある各種生理活性ポリペプチド、タンパク質及びこれらの誘導体、たとえ
ば、インスリン、カルシトニン、アンギオテンシン、バソプレシン、デスモプレ
10 シン、LH-RH（黄体形成ホルモン放出ホルモン）、ソマトスタチン、グルカ
ゴン、オキシトシン、ガストリン、シクロスポリン、ソマトメジン、セクレ
チン、h-ANP（ヒト心房性ナトリウム利尿ペプチド）、ACTH（副腎皮質
刺激ホルモン）、MSH（黒色素胞刺激ホルモン）、 β -エンドルフィン、ムラ
ミルジペプチド、エンケファリン、ニューロテンシン、ポンベシン、VIP（血
15 管作用性腸ペプチド）、CCK-8（コレシストキニン-8）、PTH（副甲状
腺ホルモン）、CGRP（カルシトニン遺伝子関連ペプチド）、TRH（チトロ
ピン放出ホルモン）、エンドセリン、hGH（ヒト成長ホルモン）、また、イン
ターロイキン、インターフェロン（ α 、 β 、 γ ）、コロニー刺激因子、腫瘍壊死
因子等のサイトカイン類、及びこれらの誘導体等が挙げられる。このペプチド、
20 タンパク質には、天然由来のもののみならず、薬理学的に活性な誘導体およびこ
れらの類似体（例えば、遺伝子組換えによる欠失、置換、付加体等）も含ま
れる。従って、たとえば本発明で対象とするカルシトニンには、サケカルシトニ

ン、ヒトカルシトニン、ブタカルシトニン、ウナギカルシトニンおよびニワトリカルシトニンなどの天然に存在する生成物のみならず、[A s u 1, 7] -ウナギカルシトニン（エルカトニン）のような類似体も含まれる。また、インスリンでは、ヒトインスリン、ブタインスリン、ウナギインスリン、のみならずそれら
5 の遺伝子組換え体等の類似体も含まれる。

本発明に使用される消化管下部に送達したい物は、1種、2種以上を混合しても、また、薬学上許容される担体と混合しても良い。

更に、小腸で吸収されると初回通過効果が大い、あるいは、小腸において、未消化の食物や消化液成分と相互作用し吸収が阻害される等の理由で、生物学的
10 利用率が低くなっている薬物は、本発明の有効成分に好ましい例である。小腸で吸収されると上部消化管の薬物代謝酵素の影響を受ける薬物の場合も、大腸の直腸部分で薬物を放出・吸収させることが好ましい例である。

これらの消化管下部に送達させたい物は、他の医薬品添加物及び食品添加物として許容される添加物と適宜混合されていてもよく、油性基材中に含まれていて
15 も良い。

「腸溶性高分子膜」とは、pHが5以上の液で可溶な重合体を基材として作られた腸溶性皮膜である。本製剤に用いられる際に、耐胃液性を付与できる材料で、従来より広く使用されている各種の腸溶性基剤であればよく、特に限定されない。本システムにおいては、酸性において溶解するポリマーを胃内の低pH
20 環境から保護するために最外層に腸溶性皮膜を施すことが好ましい。このような腸溶性皮膜に使用する基剤の具体的な例としては、メタアクリル酸-アクリル酸メチル共重合体、メタアクリル酸-アクリル酸エチル共重合体等のアニオン型ア

クリル樹脂、メタアクリル酸コポリマー（たとえばオイドラギットL、オイドラギットS（いずれも商品名；独・レーム社）など）、ヒドロキシプロピルメチルセルロースアセテートサクシネート（HPMCAS）、ヒドロキシプロピルメチルセルロースフタレート（HPMCP）、セルロースアセテートフタレート（CAP）、ヒドロキシプロピルメチルセルロース（HPMC）、カルボキシメチルセルロースアセテートフタレート（CMCAP）、セラック等が例示され、これらの混合物も使用できる。この腸溶性皮膜は、通常の方法でコーティングしてフィルム層を成形させて使用すれば良いが、この基剤を用いて製造される腸溶性のカプセルにして使用することも可能である。即ち、消化管下部で有効成分を放出する構成単位、例えば、本発明の化合物＜A＞と高分子＜B＞を少なくとも含む消化管下部崩壊性組成物を用いたソフトカプセルを腸溶性のカプセルに入れて使用することもできる。

本発明の明細書中において「被覆された」とは、コーティングし被覆膜を成形した状態だけでなく、例えば上述のようなカプセルに入れる状態も包含される。

15 本発明のシステムにおいては、これら有効成分を消化管下部において吸収あるいは分散させやすくするために、薬学的に許容され得る添加剤を1種または複数添加することも可能である。このような添加剤としては、油脂、界面活性剤、中鎖脂肪酸カルボン酸及びその塩、EDTA、またペプチドなどの吸収においては結腸での酵素分解を抑えるために各種プロテアーゼインヒビターが挙げられる。

20 油脂としては中鎖脂肪酸トリグリセライド（ミグリオール等）、ハードファット（ウィテップゾール等）、植物油（オリーブ油等）が例示される。界面活性剤としては各種胆汁酸塩、ラウリル硫酸ナトリウム、ショ糖脂肪酸エステル、

ソルビタン脂肪酸エステル、ポリオキシソルビタン脂肪酸エステル（Twee n 8 0 等）、ポリオキシエチレン硬化ヒマシ油（H C O 6 0 等）、ポリオキシエチレンラウリルエーテル、ポリエチレングリコール脂肪酸エステル及び／またはそれとグリセライドとの混合物（たとえば商品名；ゲルシエ（仏・ガテフォセ 5 社））等が例示される。中鎖脂肪族カルボン酸としてはカプロン酸、カプリル酸、カプリン酸、ラウリン酸、ミリスチン酸等が挙げられ、その塩としてはナトリウム塩やカリウム塩が代表的である。プロテアーゼインヒビターとしては、アプロチニン、ウリナスタチン、メシル酸カモスタット等が例示される。

本発明の消化管下部崩壊性組成物及びその該組成物を用いた成形体、それらを 10 用いた消化管下部放出性製剤もしくはシステムにおける特別に好ましい構成要素の組合わせを、以下に挙げるが、本発明はこれらに限定されるものではない。

消化管下部崩壊性組成物としては、a) シスチンと少なくともキトサンを含有することを特徴とする消化管下部崩壊性組成物、b) シスチンと少なくともキトサン及び消化管下部の崩壊速度を制御する物質を含有することを特徴とする消化 15 管下部崩壊性組成物、c) 組成物中にシスチンを含むドメインを、少なくともキトサンを含有するマトリックス中に分散することを特徴とする消化管下部崩壊性組成物、d) 組成物中にシスチンを含むドメインを、少なくともキトサン及び消化管下部の崩壊速度を制御する物質を含有するマトリックス中に分散することを特徴とする消化管下部崩壊性組成物であることが特別に好ましい。

20 成形体としては、a) シスチンと少なくともキトサンを含有することを特徴とする消化管下部崩壊性組成物を、形付けした内容物を消化管下部で放出するための成形体、b) シスチンと少なくともキトサン及び消化管下部の崩壊速度を制御

する物質を含有することを特徴とする消化管下部崩壊性組成物を、形付けした内容物を消化管下部で放出するための成形体、 c) 成形体中にシスチンを含むドメインを、少なくともキトサンを含有するマトリックス中に分散することを特徴とする消化管下部崩壊性組成物を、形付けした内容物を消化管下部で放出するための成形体、 d) 成形体中にシスチンを含むドメインを、少なくともキトサン及び消化管下部の崩壊速度を制御する物質を含有するマトリックス中に分散することを特徴とする消化管下部崩壊性組成物を、形付けした内容物を消化管下部で放出する成形体であることが特別に好ましい。

製剤としては、 i) シスチン及び少なくともキトサンを含有することを特徴とする、消化管下部崩壊性組成物及び有効成分< C >が、腸溶性高分子膜で被覆されたことを特徴とする、消化管下部放出性製剤、 i i) 有効成分< C >及び薬学的に許容される担体を含む組成物が、シスチン及び少なくともキトサンを含有することを特徴とする、消化管下部崩壊性組成物で被覆され、さらに腸溶性高分子膜で被覆されたことを特徴とする、消化管下部放出性製剤、 i i i) 有効成分< C >及び薬学的に許容される担体を含む組成物が、組成物中にシスチンを含むドメインを、シスチン及び少なくともキトサンを含有するマトリックス中に分散することを特徴とする消化管下部崩壊性組成物で被覆され、さらに腸溶性高分子膜で被覆されたことを特徴とする、消化管下部放出性製剤であることが特別に好ましい。

20 システムとしては、 i) シスチンと少なくともキトサンを含有することを特徴とする消化管下部崩壊性組成物及び腸溶性高分子膜を用いることを特徴とする、消化管下部に送達させたい物を、経口的に摂取し、選択的に消化管下部で放出す

- るためのシステム、i i) 消化管下部に送達させたい物をシスチン及び少なくともキトサンを含有することを特徴とする消化管下部崩壊性組成物で被覆し、または組成物中に含有させ、さらに腸溶性高分子膜で被覆されたことを特徴とする、消化管下部に送達させたい物を、経口的に摂取し、選択的に消化管下部で放出する
- 5 ためのシステム、またはi i i) 有効成分< C > 及び薬学的に許容される担体を含む組成物が、組成物中にシスチンを含むドメインを、シスチン及び少なくともキトサンを含有するマトリックス中に分散することを特徴とする、消化管下部崩壊性組成物で被覆され、さらに腸溶性高分子膜で被覆されたことを特徴とする、消化管下部に送達させたい物を、経口的に摂取し、選択的に消化管下部で
- 10 放出するためのシステムであることが特に好ましい。

前記、本発明の消化管下部崩壊性組成物、成形体、消化管下部放出性製剤またはシステムの特別に好ましい構成要素の組合わせに使用されるキトサンは、前述の通り単独で使用しても組合わせて使用しても良い。合成陽イオン高分子、例えば酸可溶な疎水性の高分子を組合わせて使用することで、キトサンの水への膨潤

15 を抑制し、より耐水性を向上させることが可能である。

シスチンとキトサンの配合重量比は任意に設定できるが、10/90~90/10の範囲とすることが好ましい。また、寒天とゼラチンの配合重量比は、10/90~90/10の範囲とすることが好ましい。更に、寒天、ゼラチンの合計配合重量はカプセル皮膜全体に対して5%以上（重量%；乾燥重量に対する値）

20 であることが好ましい。

本発明の消化管下部に送達させたい物を経口的に摂取し、消化管下部に選択的に送達するシステムが対象とする適応疾患は、主薬効に基づいて特に制限は

なく、全身性、局所性の投与を目的とするいずれの場合も考えられる。局所性の目的のものとは、下部消化管疾患（潰瘍性大腸炎、クローン病、大腸癌、結腸癌、大腸ポリープ、過敏大腸症、過敏性腸症候群等）が挙げられる。また、腸内フローラ成形剤、痔疾患治療剤、整腸剤、下剤などの製剤として使用することもできる。

次に、本発明の実施例ならびに試験例を示し、本発明およびその効果を、更に具体的に説明する。

（実施例 1）

寒天 1 g、シスチン 1 g、グリセリン 1 g に水 50 mL を加え、90℃
10 で攪拌し寒天を溶解した。この懸濁液の温度を 70℃ まで下げた後ゼラチンを 1.5 g 加え溶解した。更に、キトサン 1.5 g（キトサン LL[®]、粘度（0.5%、20℃）；20 cps 以上、焼津水産）、酢酸 0.5 g を水 25 mL に溶解したものを加え、攪拌して均一な懸濁液とした。

この懸濁液の 7 mL を内径 9.3 mm のシャーレに展延、乾燥してキャストフィルム（膜厚約 60 μm）を作成した。
15

（実施例 2）

寒天 1 g、シスチン 1 g、グリセリン 1 g、コーンスターチ 1 g に水 50 mL を加え、90℃ で攪拌し寒天、コーンスターチを溶解した。次にこの懸濁液の温度を 70℃ まで下げた。更に、キトサン 1.5 g（キトサン LL[®]、粘度
20 （0.5%、20℃）；20 cps 以上、焼津水産）、酢酸 0.5 g を水 25 mL に溶解したものを加え、攪拌して均一な懸濁液とした。

この懸濁液の 7 mL を内径 9.3 mm のシャーレに展延、乾燥してキャスト

トフィルム（膜厚約60 μ m）を作成した。

（比較例1）

寒天1 g、 β -シクロデキストリン1 g、グリセリン1 g、コーンスターチ1 gに水50 mLを加え、90℃で攪拌し寒天、コーンスターチを溶解した。次に
5 この懸濁液の温度を70℃まで下げた。更に、キトサン1.5 g（キトサンLL[®]、粘度（0.5%、20℃）；20 cps以上、焼津水産）、酢酸0.5 gを水25 mLに溶解したものを加え、攪拌して均一な懸濁液とした。

この懸濁液の7 mLを内径9.3 mmのシャーレに展延、乾燥してキャストフィルム（膜厚約60 μ m）を作成した。

10 （実施例3）

寒天2 g、シスチン8 g、グリセリン8 gに水100 mLを加え、90℃で攪拌し寒天を溶解した。この懸濁液の温度を70℃まで下げた後、ゼラチン10 gを加え攪拌しゼラチンを溶解した。更に、キトサン6 g、クエン酸6 gを水60 mLに溶解したものを加え、攪拌して均一な懸濁液とした。この懸濁液を皮膜液
15 とし、脂溶性赤色色素スダンIVを中鎖脂肪酸トリグリセライド（MCT）に溶解した溶液（0.25 mg/g）を内容液として、液中滴下法により、粒径約2.4 mm、重量約8.9 mg（内容量約5.3 mg）のシームレスソフトカプセルを製造した。キトサンは、キトサンLL[®]（粘度（0.5%、20℃）；20 cps以上、焼津水産）とキトサン100[®]（粘度（0.5%、20℃）；
20 90.2 cps、和光）を2.8：3.2で混合して用いた。

（実施例4）

実施例3に準じた製造方法で、インドメタシンを中鎖脂肪酸トリグリセライド

(MCT) に分散させた懸濁液 (50 mg/g) を内容液として、粒径約 2.4 mm、重量約 8.7 mg (内容量約 5.9 mg) のシームレスカプセルを製造した。

(試験例 1)

- 5 実施例 1、2 及び比較例 1 で得られたキャストフィルムを Wistar 系ラットの盲腸内容物懸濁液 (盲腸内容物湿重量 30 g / pH 6.8 炭酸緩衝液 60 g) または pH 6.8 炭酸緩衝液の入った密封容器に入れて浸漬し、空隙部を炭酸ガス置換した後密封し 37℃ で 16 ~ 20 時間軽く振とうした。振とう後キャストフィルムを取り出し水で洗浄後乾燥し、各々キャストフィルムの表面を
- 10 走査電子顕微鏡で 1000 倍にて観察した。

炭酸緩衝液は、各成分を秤量し、水適量に溶解し、全量 1 L として、この溶液に CO₂ をバブリングして pH 6.8 に調整して作製した。

	NaHCO ₃	9.240 g
	Na ₂ HPO ₄ · 12H ₂ O	7.125 g
15	NaCl	0.470 g
	KCl	0.450 g
	CaCl ₂ · 2H ₂ O	0.073 g
	MgCl ₂ · 6H ₂ O	0.087 g
	H ₂ O	適量
20	全量	1 L

比較例 1 のキャストフィルムは盲腸内容物懸濁液中浸漬後も表面は滑らかで侵食は観察されなかったが、実施例 1 のキャストフィルムでは深い侵食が観察

され、実施例 2 のキャストフィルムにおいては更に侵食が亢進した。また実施例 1、2 のキャストフィルムは炭酸緩衝液での浸漬では侵食は観察されなかった。

ここで、「侵食」とは、皮膜表面から分解もしくは溶解により、皮膜の一部が脱離して溝もしくは穴ができた状態を示す。結果を走査電子顕微鏡写真図 1 ないし図 4 に示す。

図 1 (a) 実施例 1 のキャストフィルム

試験前

図 1 (b) 実施例 1

10 炭酸緩衝液中

16 時間 (37℃)

図 2 実施例 1

盲腸内容物懸濁液中

16 時間 (37℃)

15 図 3 (a) 比較例 1 のキャストフィルム

試験前

図 3 (b) 比較例 1

炭酸緩衝液中

20 時間 (37℃)

20 図 4 比較例 1

盲腸内容物懸濁液中

20 時間 (37℃)

(試験例 2)

実施例 3 で得られたシームレスソフトカプセル 3 個を腸溶性カプセル (動物用腸溶性カプセル MGS・AS-M タイプ、フロイント産業) に充填し、飽食状態及び 20 時間絶食状態のラットに経口投与した。飽食状態で、4 ~ 24 時間で、
5 経時的にラットを屠殺し消化管内のカプセルを観察した。その結果を図 5 に示す。

本試験において、飽食時のカプセルは回腸までの消化管上部においては崩壊せず皮膜の強度も高いままで内容液の漏れは観察されなかった。また、皮膜の強度は高いままであった。しかしながら、盲腸及び結腸においては、皮膜強度が低下
10 しており、カプセルの崩壊及び内容液の漏出もが観察された。

皮膜強度は、以下のようにして測定した。消化管から取り出したカプセルを、キムワイプを敷いたシャーレにとり、可動スタンドに取り付けたフォースゲージ (アイコーエンジニアリング株式会社製、MODEL-9500) のプローブを垂直方向に稼動しカプセルを押し、カプセルが破損して内容液が漏れ出す時の最大荷重 (単位: N) を記録した。皮膜強度が、0.1 N 以下の場合、「皮膜強度
15 が低下した」とした。未変化シームレスソフトカプセルでは、0.25 N 以上の皮膜強度を有していた。また、黒色化したシームレスソフトカプセルは、0.1 N 以下の皮膜強度であり、皮膜強度は低下していた。

(実施例 5)

20 キトサン 9 g (キトサン PSH®、粘度 (0.5 %、20℃) ; 100 cps 以上、焼津水産) に、水 480 g を加え分散後、攪拌しながら酢酸 81 g を徐々に添加し、キトサンを溶解した。

この溶液に、メタアクリル酸ジメチルアミノエチル・メタアクリル酸メチル・メタアクリル酸ブチルコポリマー（オイドラギットE[®]、独・レーム社）9 gをエタノール300 gに溶解した溶液を加え、更にシスチン9 gを水100 gに分散した懸濁液を加え攪拌して均一にし、懸濁液とした。

- 5 この懸濁液の7 mlを内径9.3 mmのシャーレに展延し、乾燥してキャストフィルムを作製した。

（比較例2）

実施例5からシスチンを除いた以外は、実施例5と同様にしてキャストフィルムを作製した。

- 10 （試験例3）

上記実施例5及び比較例2で作製されたキャストフィルムについて、試験例1と同様にして、盲腸内容物懸濁液および炭酸緩衝液中での振とう試験を行った。

その結果のデジタルマイクロスコープによる画像を図6に示す。図6（a）は実施例5で作製したキャストフィルム、図6（b）は比較例2で作製したキャスト

- 15 フィルムであり、各画像中、左側（白く見えるフィルム）が炭酸緩衝液中で、右側が盲腸内容物懸濁液中で振とうした結果である。

図6（a）の右側のマット紙背景中の黒い断片は、本発明組成物から得られたキャストフィルムであり、盲腸内容物懸濁液中へ浸漬することにより黒色化し、完全に崩壊することが示された。

- 20 （実施例6）

実施例5で作製した懸濁液をコーティング液として用いた。

モデル薬物としてテオフィリン20 mg、及び小腸での溶出防止剤としてステ

アリン酸マグネシウム 40 mg を充填し、バンドシールを施した 3 号ゼラチン硬カプセルに、上記で調製したコーティング液を、コーティング装置（ドリアコーター 200、パウレック）を用いて噴霧し、カプセルのコーティングを行った。

次いでコーティングされたカプセルを、40℃、75%に設定した恒温恒湿器 5 に入れ、24 時間加湿処理を行った。

（試験例 4）

実施例 6 で得られたコーティングカプセルについて、小腸での耐性を確認するために、日本薬局方溶出試験パドル法にて溶出試験を行った。

試験液は日本薬局方第 2 液（pH 6.8）で、パドル回転数は毎分 50 回転と 10 した。

模擬腸液である日本薬局方第 2 液中について、実施例 6 のカプセルからのテオフィリンの溶出率は非常に低く、本カプセルが小腸において耐性を示すことが示された。結果を下記に示す。

表 2 小腸耐性試験

時 間	テオフィリン溶出率 (%)		
	Na 1	Na 2	平 均
0 h r	0	0	0
1 h r	0.3	0.2	0.3
2 h r	1.7	2.0	1.9
3 h r	4.8	5.3	5.1
4 h r	7.8	8.2	8.0

（試験例 5）

実施例 6 のカプセルを 1 号腸溶性カプセル（フロイント産業）に入れ、更に小

腸到達マーカーとしてアセトアミノフェン10mg、結腸到達マーカーとしてスルファサラジン50mgを加え、カプセル接合部をカプセル原料であるヒドロキシプロピルメチルセルロースアセテートサクシネートを塩化メチレン・エタノール混液（1：1）に溶解した液でシールした。

- 5 このカプセルをイヌに水30mLと共に経口投与し経時的に採血を行い、得られた血漿中の薬物濃度を測定した。イヌはカプセルの消化管内移動速度を揃えるために、投与30分前に消化管運動抑制剤として硫酸アトロピンを静注した。なお、結腸到達マーカーであるスルファサラジンは結腸に到達後腸内細菌により分解を受け、分解物であるスルファピリジンを放出する。
- 10 このスルファピリジンの血中濃度を測定することでカプセルの結腸到達の目安とした。モデル薬物およびマーカー物質の血中濃度推移を図7に示す。

テオフィリンは、スルファピリジンの血中出现に比べ遅れて出現することから、実施例6でコーティングしたカプセルには、小腸での耐性が確認され、更にカプセルが結腸に到達後少し時間をおいて崩壊し内容物を放出することが示された。

15

- 以上より、本発明のソフトカプセル処方のカーストフィルムは、盲腸内容物懸濁液中へ浸漬することにより、表面が侵食されることが示された。また、この盲腸内容物懸濁液中で侵食を受けたカーストフィルムの乾燥重量は、炭酸緩衝液中で侵食が観察されなかったカーストフィルムの乾燥重量に比べ減少した。更に本
- 20 発明のシスチンとキトサンをカプセル皮膜中に含有するシームレスソフトカプセルは、回腸までの消化管上部においては崩壊せず、内容液の漏れも観察されず、皮膜の強度も高かった。盲腸及び結腸においては皮膜の強度が低下しており、カ

プセルの崩壊及び内容液の漏出が示された。

本発明のフィルムコーティング処方のカストフィルムは、盲腸内容物懸濁液中への浸漬により、黒色化し、完全に崩壊することが示された。

また、本発明のフィルムコーティングカプセルは、日局第2液を用いた溶出試験において、内容薬物の溶出を抑え、更にイヌへの投与実験においては、結腸到達マーカーよりやや遅れて放出が見られ、結腸特異的な放出が起きていることが示された。

従って、本発明の消化管下部崩壊性組成物を用いれば、消化管下部への標的化にとって特異性が高いと考えられる腸内細菌を利用し、細菌叢の変動による消化管内pH変化の影響を受けず、確実に速やかに消化管下部選択的に内容物を送達できる。

産業上の利用可能性

本発明の消化管下部崩壊性組成物、すなわち分子量が1000以下で、ジスルフィド結合を有し、腸内細菌による還元により分解される化合物<A>と分子量が1000超で、腸内細菌により分解される性質及び／またはpH低下により軟化・膨潤ないしは溶解する性質を有する高分子を含有することを特徴とする消化管下部崩壊性組成物を用いることにより、腸内細菌を利用し、細菌叢の変動による結腸内pH変化の影響を受けず、確実に速やかに消化管下部選択的に内容物が送達されることができる。したがって、本発明の消化管下部崩壊性組成物を用いた製剤は、潰瘍性大腸炎やクローン病等の局所性消化管疾患の治療に際して、局所に薬物を集積させることができ、治療効果の向上に有用である。

また、消化管下部の到達前に薬物の放出が起こらないことから、全身に薬物が循環することに起因する副作用が低減され、有効部位到達前の薬物損失が防止されることにより、治療効果の向上に有用である。

- また、本発明の崩壊性組成物を用いると、全身循環に移行して効力を発揮する
- 5 性質の薬物の結腸での滞留時間、つまり吸収有効時間を長くすることができることから、結腸を吸収部位として利用することが可能となる。特にペプチド、タンパク系の薬物の場合には、結腸は消化酵素の分泌がなく、大腸粘膜のペプチダーゼ活性も小腸に比較して低いため、結腸で放出された薬物はこれらの酵素による代謝を受けにくく、より大きな生物学的利用率を得ることも可能となる。
- 10 また、本発明の消化管下部に送達させたい物を経口的に摂取し、消化管下部に選択的に送達するシステムは、更に、小腸で吸収されると初回通過効果が大きい、あるいは、小腸において、未消化の食物や消化液成分と相互作用し吸収が阻害される等の理由で、生物学的利用率が低くなっている薬物に対して、生物学的利用率の向上に好ましい例として使用できる。また、小腸で吸収されると上部
- 15 消化管の薬物代謝酵素の影響を受ける薬物の場合も、大腸の直腸部分で薬物を放出、吸収させる好ましい例として使用できる。

また、本発明のシステムは、持続性製剤、X線及びNMR画像成形術を用いた診断あるいは健康食品（機能性食品）にも使用可能である。

請求の範囲

1. 分子量が1000以下で、ジスルフィド結合を有する化合物<A>と分子量が1000超で、腸内細菌により分解される性質及び／またはpH低下により軟化・膨潤ないしは溶解する性質を有する高分子を含有することを特徴とする、消化管下部崩壊性組成物。
2. 前記化合物<A>を含むドメインを、前記高分子を含有するマトリックス中に分散することを特徴とする、請求項1に記載の消化管下部崩壊性組成物。
3. 前記マトリックスが、さらに、消化管下部での崩壊速度を制御する物質を含む、請求項1または2に記載の消化管下部崩壊性組成物。
4. 前記化合物<A>が、L-シスチン、D-シスチン、DL-シスチン、ジグリシルシスチン、シスタミン、L-シスチニルジグリシン、グルタチオンジスルフィド、またはチオグリコール酸ジスルフィド ($\text{HOOC}-\text{R}-\text{S}-\text{S}-\text{R}-\text{COOH}$ / Rは低級アルキレン基を表す) からなる群から任意に選ばれる化合物である請求項1ないし3のいずれかに記載の消化管下部崩壊性組成物。
5. 前記高分子が、キトサン、メタアクリル酸ジメチルアミノエチル・メタアクリル酸メチル・メタアクリル酸ブチルコポリマー、またはポリビニルアセタールジエチルアミノアセテートからなる群から任意に選ばれる高分子もしくはそれらの混合物である請求項1ないし4のいずれかに記載の消化管下部崩壊性組成物。
6. 前記化合物<A>がシスチンであり、前記高分子が少なくともキトサンである請求項1ないし5のいずれかに記載の消化管下部崩壊性組成物。

7. 前記消化管下部崩壊速度を制御する物質が、エチルセルロース、寒天、ペクチン金属塩、カラギーナン、ゼラチン、ペクチン、でんぷん、セルロース、メタアクリル酸ジメチルアミノエチル・メタアクリル酸メチル・メタアクリル酸ブチルコポリマー、ポリビニルアセタールジエチルアミノアセテートからなる群から任意に選ばれる1種以上の消化管下部崩壊速度を制御する物質である請求項3ないし6のいずれかに記載の消化管下部崩壊性組成物。
8. 請求項1ないし7のいずれかに記載の組成物を、形付けした、有効成分< C >を消化管下部で放出するための成形体。
9. 前記成形体中に有効成分< C >が含有されている請求項8に記載の成形体。
10. 前記成形体が、カプセル、フィルム、シート、または被覆膜である請求項8または9に記載の成形体。
11. 少なくとも、有効成分< C >および請求項1ないし7のいずれかに記載の消化管下部崩壊性組成物が、腸溶性高分子膜で被覆されたことを特徴とする、消化管下部放出性製剤。
12. 有効成分< C >及び薬学的に許容される担体を含む組成物が、請求項1ないし7のいずれかに記載の消化管下部崩壊性組成物で被覆され、さらに腸溶性高分子膜で被覆されたことを特徴とする、請求項11に記載の消化管下部放出性製剤。
13. 請求項1ないし7のいずれかに記載の消化管下部崩壊性組成物及び腸溶性高分子膜を用いることを特徴とする、消化管下部に送達させたい物を、経口的に摂取し、選択的に消化管下部で放出するためのシステム。

14. 消化管下部に送達させたい物を、請求項1ないし7のいずれかに記載の消化管下部崩壊性組成物で被覆し、または組成物中に含有させ、さらに腸溶性高分子膜で被覆することを特徴とする、請求項13に記載のシステム。



FIG. 1(a)

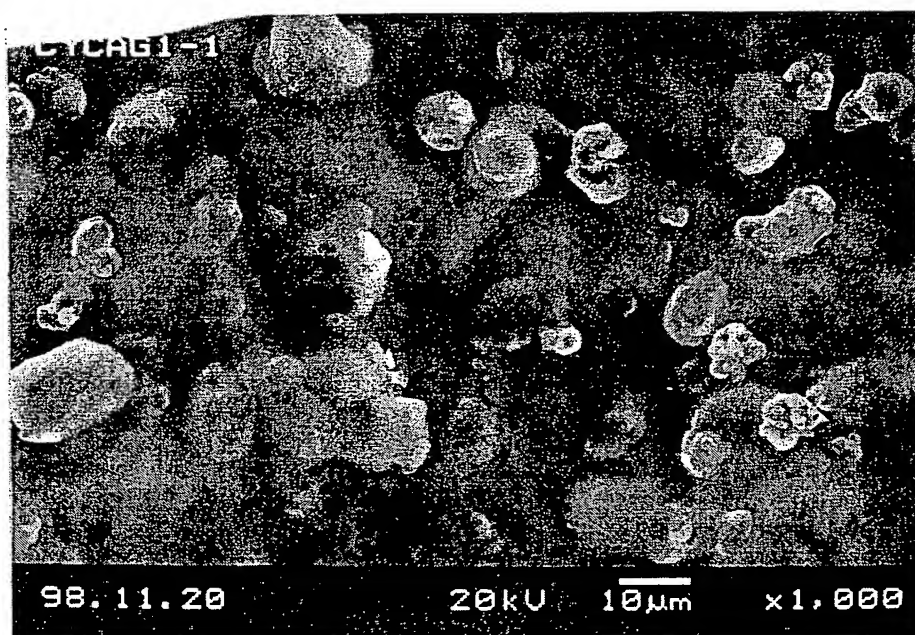


FIG. 1(b)

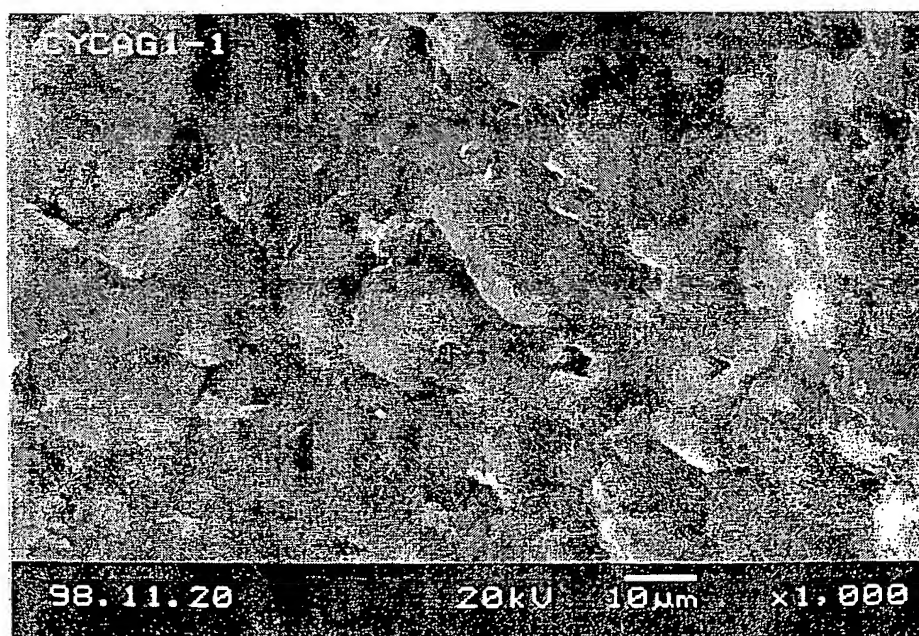




FIG. 2

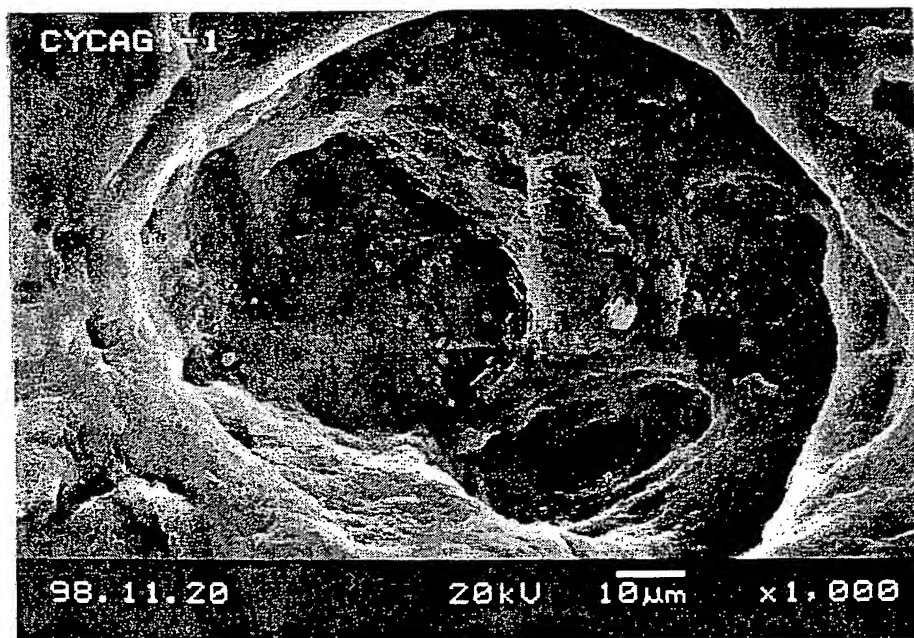




FIG. 3(a)

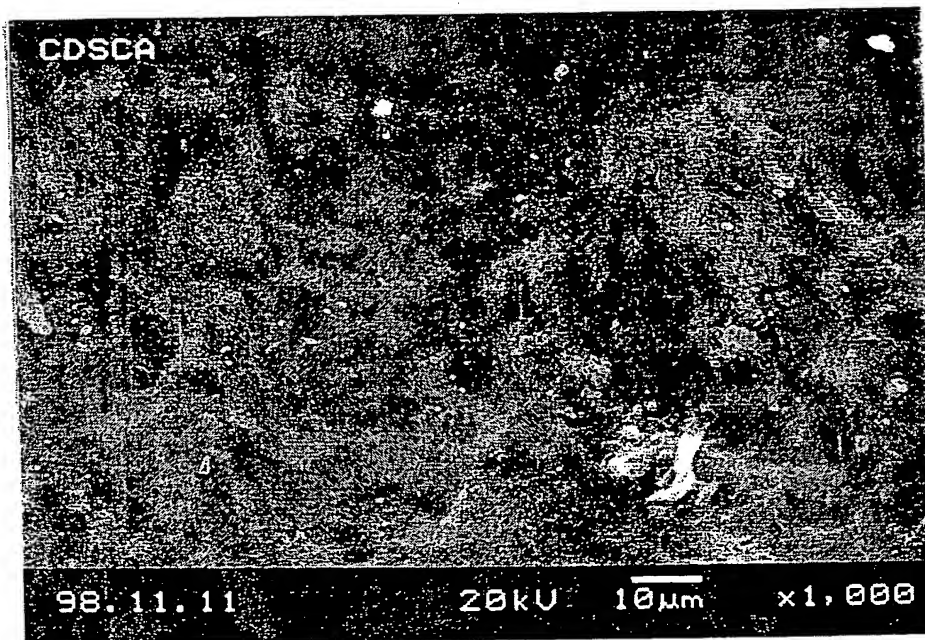


FIG. 3(b)

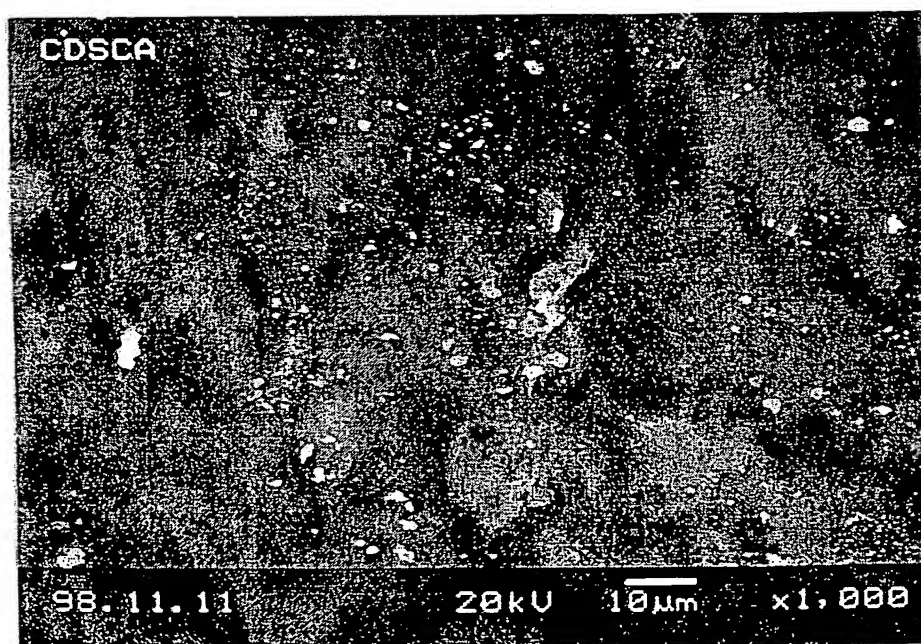




FIG. 4

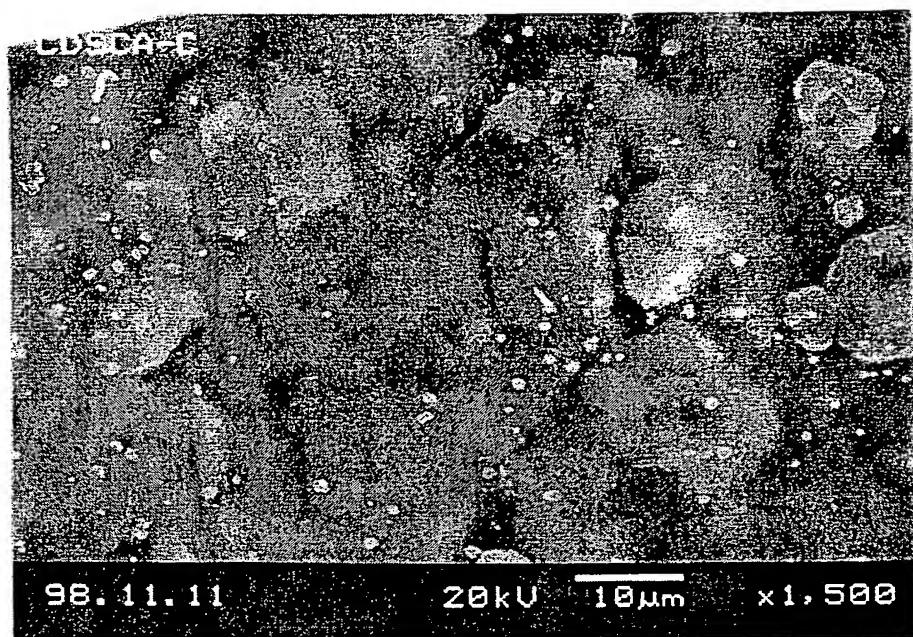




FIG. 5

	胃	十二指腸	空腸	回腸	盲腸	結腸	排出
	stomach	duodenum	jejunum	ileum	cecum	colon	excreta
4h							
6h							
8h							
10h							
12h							
14h							
24h							



腸溶性カプセル未崩壊

○ 未変化のシームレスソフトカプセル

⊗ 褐色化したシームレスソフトカプセル

● 黒色化したシームレスソフトカプセル(被膜強度が低下)

◐ 破裂したシームレスソフトカプセル(内溶液漏出)



FIG. 6(a)

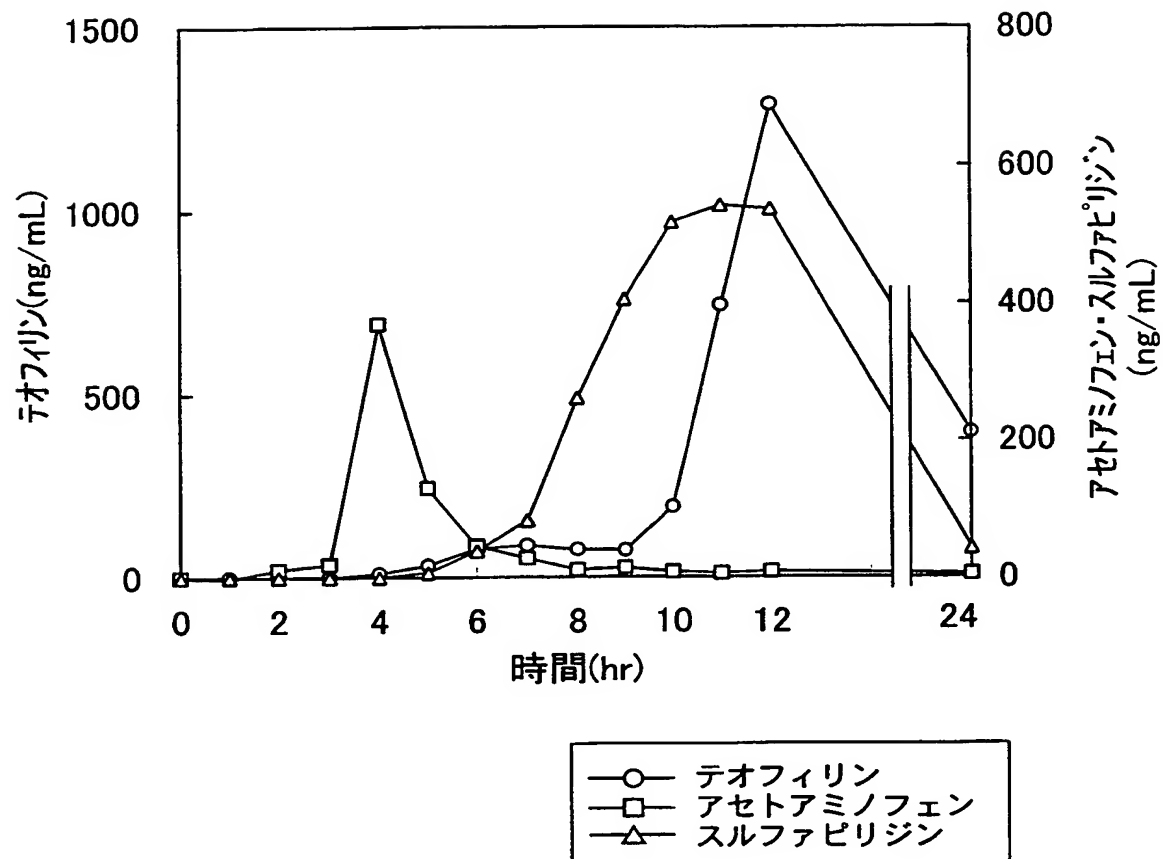


FIG. 6(b)





FIG. 7





INTERNATIONAL SEARCH REPORT

International application No.

PCT/JP00/03770

A. CLASSIFICATION OF SUBJECT MATTER

Int.Cl⁷ A61K 47/20, 47/36, 47/32, 47/38, 9/56

According to International Patent Classification (IPC) or to both national classification and IPC

B. FIELDS SEARCHED

Minimum documentation searched (classification system followed by classification symbols)

Int.Cl⁷ A61K 9/00-9/72, 47/00-47/48

Documentation searched other than minimum documentation to the extent that such documents are included in the fields searched

Electronic data base consulted during the international search (name of data base and, where practicable, search terms used)

CA (STN), WPI/L (QUESTEL)

C. DOCUMENTS CONSIDERED TO BE RELEVANT

Category*	Citation of document, with indication, where appropriate, of the relevant passages	Relevant to claim No.
A	WO, 96/10994, A1 (Danbiosyst UK Ltd.), 18 April, 1996 (18.04.96), entire specification, especially, Claim 1 & AU, 9474436, A & JP, 10-507219, A	1-14
A	WO, 95/35100, A1 (Danbiosyst UK Ltd.), 28 December, 1995 (28.12.95), entire specification, especially, Claim 4 & AU, 9527460, A & GB, 2303550, A & NO, 9605436, A & FI, 9605154, A & JP, 9-510478, A & EP, 810857, A1	1-14
A	EP, 284039, A2 (Chugai Seiyaku K.K.), 28 September, 1988 (28.09.88), entire specification, especially, Claim 1 & AU, 8813517, A & NO, 8801296, A & DK, 8801587, A & FI, 8801409, A & JP, 64-30, A & US, 5057317, A	1-14



Further documents are listed in the continuation of Box C.



See patent family annex.

* Special categories of cited documents:
 "A" document defining the general state of the art which is not considered to be of particular relevance
 "E" earlier document but published on or after the international filing date
 "L" document which may throw doubts on priority claim(s) or which is cited to establish the publication date of another citation or other special reason (as specified)
 "O" document referring to an oral disclosure, use, exhibition or other means
 "P" document published prior to the international filing date but later than the priority date claimed

"T" later document published after the international filing date or priority date and not in conflict with the application but cited to understand the principle or theory underlying the invention
 "X" document of particular relevance; the claimed invention cannot be considered novel or cannot be considered to involve an inventive step when the document is taken alone
 "Y" document of particular relevance; the claimed invention cannot be considered to involve an inventive step when the document is combined with one or more other such documents, such combination being obvious to a person skilled in the art
 "&" document member of the same patent family

Date of the actual completion of the international search
11 August, 2000 (11.08.00)

Date of mailing of the international search report
22 August, 2000 (22.08.00)

Name and mailing address of the ISA/
Japanese Patent Office

Authorized officer

Facsimile No.

Telephone No.



A. 発明の属する分野の分類 (国際特許分類 (IPC))

Int. Cl⁷ A61K 47/20, 47/36, 47/32, 47/38, 9/56

B. 調査を行った分野

調査を行った最小限資料 (国際特許分類 (IPC))

Int. Cl⁷ A61K 9/00-9/72, 47/00-47/48

最小限資料以外の資料で調査を行った分野に含まれるもの

国際調査で使用した電子データベース (データベースの名称、調査に使用した用語)

CA(STN), WPI/L(QUESTEL)

C. 関連すると認められる文献

引用文献の カテゴリー*	引用文献名 及び一部の箇所が関連するときは、その関連する箇所の表示	関連する 請求の範囲の番号
A	WO, 96/10994, A1 (Danbiosyst UK Ltd.), 18. 4月. 1996 (18. 04. 96), 明細書全体の記載、特に、請求項1 & AU, 9474436, A & JP, 10-507219, A	1-14
A	WO, 95/35100, A1 (Danbiosyst UK Ltd.), 28. 12月. 1995 (28. 12. 95), 明細書全体の記載、特に、請求項4 & AU, 9527460, A & GB, 2303550, A & NO, 9605436, A & FI, 9605154, A & JP, 9-510478, A & EP, 810857, A1	1-14

☒ C欄の続きにも文献が列挙されている。☐ パテントファミリーに関する別紙を参照。

* 引用文献のカテゴリー

「A」 特に関連のある文献ではなく、一般的技術水準を示すもの
「E」 国際出願日前の出願または特許であるが、国際出願日以後に公表されたもの
「L」 優先権主張に疑義を提起する文献又は他の文献の発行日若しくは他の特別な理由を確立するために引用する文献 (理由を付す)
「O」 口頭による開示、使用、展示等に言及する文献
「P」 国際出願日前で、かつ優先権の主張の基礎となる出願

の日の後に公表された文献

「T」 国際出願日又は優先日後に公表された文献であって出願と矛盾するものではなく、発明の原理又は理論の理解のために引用するもの
「X」 特に関連のある文献であって、当該文献のみで発明の新規性又は進歩性がないと考えられるもの
「Y」 特に関連のある文献であって、当該文献と他の1以上の文献との、当業者にとって自明である組合せによって進歩性がないと考えられるもの
「&」 同一パテントファミリー文献

国際調査を完了した日

11. 08. 00

国際調査報告の発送日

22.08.00

国際調査機関の名称及びあて先

日本国特許庁 (ISA/JP)

郵便番号 100-8915

東京都千代田区霞が関三丁目4番3号

特許庁審査官 (権限のある職員)

高原 慎太郎



4C 9053

電話番号 03-3581-1101 内線 3452

C (続き) . 関連すると認められる文献		
引用文献の カテゴリー*	引用文献名 及び一部の箇所が関連するときは、その関連する箇所の表示	関連する 請求の範囲の番号
A	EP, 284039, A2 (Chugai Seiyaku K.K.), 28. 9月. 1988 (28. 09. 88), 明細書全体の記載、特に、請求項1 & AU, 8813517, A & NO, 8801296, A & DK, 8801587, A & FI, 8801409, A & JP, 64-30, A & US, 5057317, A	1-14